

## 卷 頭 言

### 昭和 33 年 を 顧 み て

副会長 石 原 善 雄



昭和 33 年の回顧の筆を執るに先きだち、11 月 27 日皇太子殿下の御婚約の御成立を謹んで慶祝し奉る。

本会は会員数が 6000 名を超え、その財政内容は堅実になつた上に昨年は八幡製鉄渡辺記念資金および石原研究資金の寄付をうけ、会の運営が一層活潑になつたことは真に慶賀に堪えない。

言うまでもなく、本会の使命は鉄鋼に関する學術技術の振興と交流および会員相互の親睦を図ることにあるが、先ず会誌の内容である。会誌は年々充実せられ、本年は掲載論文 73、技術資料 11、講演 9、共同技術研究報告 5、講義 2、翻訳 1 の外、3 月号および 9 月号には春秋講演大会に発表せらるる研究の大要がそれぞれ 128 および 116

掲載せられ、会員の要望を着々満しつつあるように思う。

第 55 回春季大会は 4 月東京において、第 56 回秋季大会は 10 月名古屋において開催せられ、いずれも多数の出席者により盛大裡に終つた。特に名古屋においては西独乙の Max Plank 鉄鋼研究所長 Wever 教授の特別講演により一層講演会を有意義ならしめることができた。

講習会は「鋼中非金属介在物」について大阪および東京において開催せられいずれも成功であつた。本会として講習会の開催が一年 2 回では物足りないと思われるゆえ、来年は頻繁に行うようにしたいものである。

本年特に目立つたことは、海外から著名な学者および技術者を迎えて、各社が直接指導をうけた外に本会で特別講演を願い裨益せらるるところ多大であつた。すなわち 4 月 17 日 W. B. Wallis 氏 (McGraw Edison Co. LECTROMELT FURNACE DIVISION 社長) の「アメリカ合衆国製鋼業における電気炉最近の進歩について」の講演(7号掲載) 5 月 27 日 E. C. Bain 博士 (ベイナイト組織で親しみのあるアメリカ金属学会々長) の「アメリカにおける冶金的研究の傾向」と題し含蓄ある講演、10 月 17 日名古屋において F. Wever 教授 (Max Plank 鉄鋼研究所長) の「鉄鋼研究の発展過程」と題するもの、および東京において 11 月 13 日「鋼の熱処理の基礎的問題について」と題する講演などいずれもきわめて有益なものであつた。そしてこれらの機会に特に親善を一層深くすることができたことは慶賀にたえない。ただ圧延に関して、世界的権威者である H. Sedlacek 博士 (Aachen 大学教授) の「軽量工形鋼の新しい孔型設計について」と題した講演がある予定であつたが、10 月 6 日急逝せられたため中止となつた。世界的の権威者を失つたことは真に痛惜にたえず、更めて茲に哀悼の辞を捧げる。

「鉄鋼技術講座」の発刊は久しく会員の待望的であつたが目下印刷中であるから近く発刊せられる。また鉄鋼便覧は昭和 29 年改訂せられたが今回大巾に内容を改訂充実したものを編纂すべく委員会が設けられ急速に計画が進められている。

特別資金 (渡辺および石原) の用途については、会員の期待に添うべく検討した上優秀な研究に対し資金の援助、あるいは業界、学界の功績ある人の表彰などの計画が進められ、具体的に近く発表せらるる運びとなつた。

かように本年の会の活動は多彩であつたが、翻つて業界を顧みて卒直に思うがままを述べてみたいとおもう。

戦後の産業の生産復興指数では日本が世界第一位で二位はドイツであるとして諸外国注視の的となつている。第一位の日本が何故貧しく、第二位のドイツが60億ドル以上の外貨を保有して豊かなのであろうか、それは一言にして言えば日本は外国技術を買ひ、製品は国内向けであるからである。正常な輸出市場を獲得するためにも更に国内市場の一層の拡大を実現するためにも、何が一番大切かと言えば、それは技術の進歩であり、また生産性の向上である。そして生産性の向上とは量的な生産力の発展のみならず、技術革新による質的な生産力の発展をも意味するものである。この生産性向上のため第一次合理化計画は遂行せられ、その結果鋼塊生産高は 1200 万トンに達し、わが国鉄鋼業は国内基礎産業の中核であり、一方国際市場に進出しわが国としては輸出の主要な地位を占めているが、欧米諸国には遙におよばない。また、遺憾ながらこれら合理化はほとんどすべてが外国技術の導入か、輸入によつたものであつて、わが国独自の技術によつたものでないことである。技術の発展も、成果も、これを分析してみれば個々の知識の結集されたものであり、永い間かかつて積み上げられたものである。これらの技術に血がかよい、自国の富を作り出すよう発展させることが目下の急務である。これがために研究施設の有機的、合理的な運営が必要となつて来るのである。それゆゑ政府当局、学会、会社、研究機関等が活眼を開き、Max Plank 研究所、BISRA あるいは IRSID 等の姿を充分認識し、わが国鉄鋼技術開発をいかにすべきかを大乗的見地に立ち最善の方策を推進するよう切望する。

終りに臨み、安政4年12月1日大島高任氏苦心の結果の初出銑の日を記念して“鉄の記念日”を設け本年より記念行事が行われることになつたが、同氏が心血を注いで奮闘した雄姿を憶い浮べ現代の製鉄人が一層奮起せられんことを念願してやまない。

本年他界せられた俵博士、梅津博士、芥川博士の御冥福を祈り筆を擱く。